

ライバルの出現

同立戦の始まり — 第1回の思い出 —

田 中 信

同志社大学・立命館大学両校の先輩諸兄並びに日本学生航空連盟の皆様のお陰を蒙り、1965年(昭和40年)6月、初夏の高松空港で第1回の同立戦が開催されました。

私たちを教育して下さった先輩諸氏ならびに同期の仲間のお陰により、この記念すべき第1回大会に幸運にも出場させて戴き、操縦席に座らせて戴く機会を得ましたことを感謝しつつ当時を思い出しております。

私は、中小企業診断士として経営の診断と指導を職業としておりますが、企業経営の成功や失敗の事例を見聞するにつれ、経営とグライダー操縦の共通性を感じることがあります。

そのひとつが、商人なら誰もが願う商売繁盛を実現するためには「良きライバルを持つこと」の重要性です。ライバルはいない方が気持ちは楽なのですが、ライバルがいないと努力する気持ちが薄くなり向上しないようです。

私にとって同期の桜の田地川君、山田君、立命館の日野上君、水田君は強力なライバルでした。彼らの1回1回の飛行をあたかも自分が操縦しているかのように注目し参考にしました。

参加両校の熱い闘志とは別に、のんびりとした初夏の心地良い風を受けて第1回の戦いが行われました。

第1部の成績は、イメージトレーニングを重ね、前年の夏の全国大会で素晴らしい成績をおさめた我等のエース山田裕章君が最優秀選手に入賞し、常に冷静沈着で大人の風格を備えた我等の主将田地川彬君が優秀選手に入賞しました。

大会第2日に22回目の誕生日を迎えた私は、秘そかに風の女神イオラスからのバースデイプレゼントを期待したのですが女神に振り向いて貰えず

残念でした。しかし、立命館大学のエース日野上君の素晴らしい、やわらかな操縦を目にすることができ、とてもハッピーでした。

第2部では、立命館大学のホープである東君が第1位に入賞し、2位から5位まで我が同志社の佐藤真二君(故人)、一円億夫君、竹鼻信昭君、桐山隆君が入賞しました。

風の女神は今後の継続を期待したのでしょうか、団体戦は幸か不幸か引き分け持ち越しに終わり、両者気持ち良く肩を並べて撤収作業を行いました。無事第1回の大会が終り、表彰式での先輩諸兄の笑顔が印象に残っています。

結果はともかく、立命館の日野上君、水田君、3年生の東君らと一緒に合宿と競技に数日間を楽しく過ごせ、ライバルは決して敵ではなく、友人であり、仲間であり、生きた目標であることを学べた良い機会でした。

教官ならびに両校の多くの方々のご尽力により昨年で20回目を迎えました。

過去の戦績は、立命館大学が10勝6敗4引き分けです。

今の所、同志社大学の勝数が4つ少ないのは残念ですが100回もやればほぼ同数に落ち着くと思えます。

勝ち負けにこだわらず、両校仲良く、良きライバルとしてこれからも末長く継続され、多くの方々ที่グライダースポーツを楽しめますことをお祈り申し上げます。

(昭和41年卒)

同立戦の始まり — 第8回の思い出 —

金石 真一

私が3年生の当時(14年前)は、競技会といえば全国大会が10年ぶりに再会され、各校対抗戦も3～4ぐらいあった程度だと思う。競技の内容もまだお粗末であり、周回速度種目が始まったばかりで、ルールも欠陥だらけのものであった。同立戦においても、私が入学した頃は対抗戦といういかめしい空気は無く、同立合同記録会、C章とれたらうれしいナー合宿であった。しかしながら勝敗はきっちりつけられ、ルールは次第に複雑になり、全国的に競技会が盛り上がり始めた時代であった。

さて、第8回の同立戦である。この時のI部競技は、周回速度得点と滞空時間得点が並存するという変則的なもので、何ヶ月も前から競技規定の検討が幾度もなされた。にもかかわらず、競技が始まると問題が続出する。

夜のミーティングは長い、教官に怒られるは、風呂でころんで怪我するはと大変な目であった。で、結局どんな問題が続出したのか憶えてない。まあ、そんなこんなで今日の競技体系が出来上っていったのである。

競技会前半3日間は、あまりサーマルは出ず、ほとんどII部競技であった。II部選手の顔ぶれを見ると、圧倒的に同志社が有利である。これはまずII部優勝は堅い。I部選手の顔ぶれを見ると、色の黒い立命館平松などがおり、後半2日の間に引導を渡さねばなるまい。この時点では、3年生I部選手は全く眼中に無かったのであるが、後でかなり手を焼くことになる。

最終日の前日、勝負はこの日で決った。当日はサーマルが出始めたものの、シーリングが低く、なかなか旋回点を回れない。4年生の我々が周回スタートし、タスククリアできず“0”得点を重ねている間に、問題外だと思っていた立命館3年

生たちは着実に滞空得点を稼いでいった。時間は過ぎてゆき、今から滞空得点を狙っても逆点できないので、周回一本に絞るしか無い状況となった。周回得点は、滞空得点より段然高いのだ。立命館4年生も、周回へスタートするが、ゴールは出来ずに0得点と時間のムダを重ねている。そして、北林の搭乗順のとき、何と彼は搭乗を私に譲ってくれると言う。でも絶対に周回してこいとも言う。で、Ka6で離陸する。離脱後、高度を上げてゆくうちにシーリングは少しずつ高くなるが、強い北西風のためなかなか旋回点まで行けない。周回できなければみんなに会わず顔がない。春江駅へ降りてタクシーを拾い、回ってきてボケたおしても、誰も突っ込んでくれんやろし、タクシー代も無いので、往生しながら最後の旋回点を回る。ラジオを入れる。「同志社6安田クリア!ゴールに向います。」立命の連中め、見たか聞いたかこのボイス、天までとどけこの電波。チンタラ旋回してる機体は道を開けい、高速機がゴールへ飛び込むぜ。地上で観戦中のOBの皆様、金石はついに男になりました。あーグライダーやあってよかった。着陸してからは、立命館のグライダーに、「沈下沈下」と“気”を送り続ける。結果、周回はこれ一回きりでその日を終えた。翌日は強い寒気が入り、さらに冬型が強まる予報である。夜、雨乞いしたのは言うまでも無い。

最終日、しぐれ雨で北西風も強くフライト無し。これで現役の間は、同立戦負け無し3連勝である。しかし世の中よくしたもので、翌年から同志社は連敗街道真っしぐらの記録更新である。

同立戦にしる他の競技会でも、とにかく勝ってほしいぞ、現役。勝つと気持ちいいよ、ほんとに。

(昭和59年卒)